

# 韓国人の日本語学習者の 音声教育に関する研究

——発音および聞き取り上の問題点を中心に——

李 炯 宰

## 1. 研究目的

日本語と韓国語は文法構造の面から見るとよく似ている言語だと言われているが、実際は、音韻構造の枠組では相違点が少なくない。しかも、細部では音声的な特徴に大きな相違が認められ、韓国語話者の日本語学習に大きな障害となっている。従って、韓国語話者に対する日本語の音声教育は、両言語の音韻構造を音声レベルで細かく対照分析し、その結果に基づいて行わなければならない。

ところが、韓国語を母語とする日本語学習者において、日本語と韓国語との音韻体系の違いから起こりうる音声上の問題点については、すでに多くの先行研究によって指摘されてきたが、それらは、日本語の問題点が韓国人話者にとってどの程度難しいのか、それらの音声上の誤りの傾向はどうなっているのか、またその原因は何であるのか、さらに、その問題点が語レベルで現れる場合と文レベルで現れる場合とでどのように相違するのかについてはあまり言及されていない。そこで、本研究ではこれまで先行研究に指摘されてきたいろいろな問題点の内容について、日本語の初・中級段階の韓国人話者を対象にアンケートおよびテストを用いて調査を語レベルと文レベルで行うことにする。

また、発音と聞き取りの両テストの結果に基づいて、語と文レベルで、それぞれの難易度および誤聴率を求める。また、両テストの結果から、発音する場合と聞き取る場合の難易度と誤聴率の関係はどうなるのかを知ろうとする。さらに、初級学習者の結果と中級学習者の結果を比較し、それらの誤りの傾向と原因についても若干考察を加えて、韓国人話者に対するより効果的な日本語音声の教授法を開発するための基礎的な資料を提供する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査方法

調査は先行研究<sup>(1)</sup>によって指摘されているいろいろな問題点の内容をもとにし、それらに当てはまるテスト項目とアンケート項目を作って調査を行った。調査の順序はまず本調査にはいる前にアンケート調査を行い、それから聞き取りテスト1（語レベル）と聞き取りテスト2（文レベル）を全員に（1年生：35名、3年生：29名）に行った。次に発音テスト1・2を1年生10人、3年生10人を対象に行った。調査のしかたは、聞き取りテストは日本語話者<sup>(2)</sup>が調査項目を発音したテープをテープレコーダーで被調査者に聞かせ、3つの項目から最初に聞いた項目と同じものを選ばせることにした。聞き取りテスト

はテスト1・2ともに信頼性を高めるため、3回（調査項目の順はランダムである）ずつ行った。発音テストは調査項目を被調査者に読ませてテープレコーダーに録音した。

## 2.2 調査内容および項目

本研究に用いられた調査内容は、先行研究に指摘されている諸問題点の内容をもとにし、調査項目はそれらに当てはまるものを選んで作成した。調査項目の種類はアンケート、発音テスト1・2、聞き取りテスト1・2で、それぞれ23問ずつである。特に、発音と聞き取りテスト2の調査項目は発音と聞き取りテスト1の調査項目（単語）からなる短い文で作成した<sup>(3)</sup>（調査項目については表1～6を参照）。調査内容は次のようである。

1. /ウ/の音
2. 母音の無声化
3. 語頭の無声破裂音/k, p, t/
4. 語中の無声破裂音/k, p, t/
5. 語頭の有声破裂音/k, p, t/
6. 語頭の/ツ/
7. 語頭の/ザ/行音
8. 語頭の/ラ/行音
9. 語中の/ハ/行音
10. 促音
11. 拗音
12. 撥音
13. 長音（語頭、語尾）

## 2.3 被調査者

韓国の全北大学校の日本語日文学科の1年生35名と3年生29名を被調査者とした。本研究では日本語を習い始めて1年目である（何人かは高校で第2外国語として日本語を学習した経験がある）1年生を初級学習者に、また3年目である3年生を中級学習者と見なすことにする。調査は1988年10月24日と10月25日の二日間にわたって、韓国の全北大学校のクラスで行った。

## 2.4 調査結果の分析法

本研究では次のように調査結果の分析を行った。

まず、アンケート調査では調査項目に対して五段階に分けて評定を行い、それぞれの段階の項目を点数に換算し、その総計を被調査者の人数で割り、難易度の平均評定値を求めた（「非常に難しい」5点、「難しい」4点、「普通」3点、「易しい」2点、「非常に易しい」1点）。また発音テストでは、調査項目を被調査者に読んでもらって録音したテープを、日本語話者3人に2回聞かせて評定を行った。評定は、被調査者の調査項目の発音が自然な日本語であれば「1」で、自然な日本語ではない場合は「-1」、その中間段階を「0」にした。評定の結果から平均難易度を求め、また、被調査者の発音が誤っていた場合はその音を備考欄に書いてもらって、被調査者の発音上の誤りの傾向を求めた（但し、発音テスト2では被調査者に読んでもらった文の中で調査の対象である単語だけに評定を行った）。そして聞き取りテストは三肢選択式のテストを3回行い、誤った答えの合計を被調査者の人数で割り、誤聴率を求めた。

## 3. 調査結果および解釈

### 3.1 アンケート調査の結果

表1は、初級学習者の男子6名と女子29名、計35名の被調査者の評定に基づく日本語の発音と聞き取りの難易度の平均評定値を示している。この表で1点が最もむずかしく、5点が最も易しいので、平均評定値が高いのが難しいものになる。表1から、初級学習者

表 1 初級学習者のアンケートの結果の分析表

内 容		調査項目	発 音		聞きとり		
			難易度	順位	難易度	順位	
／ウ／の音		[m]	うえ	1.83	21	2.60	94
母音の無声化			くさ	2.46	11	2.51	19
語頭の無声破裂音	[k <sup>h</sup> ]	かんこく	2.23	18	2.49	20	
	[p <sup>h</sup> ]	ぴったり	2.71	3	3.03	3	
	[t <sup>h</sup> ]	てんき	2.34	15	2.60	14	
語中の無声破裂音	[k]	せいかつ	2.40	13	2.46	22	
	[p]	せんばい	2.03	21	2.49	20	
	[t]	はいたつ	2.43	12	2.54	17	
語頭の有声破裂音	[g]	がっこう	2.37	14	2.69	10	
	[b]	ばんこく	2.31	17	2.74	8	
	[d]	だいがく	2.54	8	2.66	11	
語頭の／ツ／	[ts <sup>hw</sup> ]	つくえ	2.69	5	2.80	7	
語頭の／ザ／行音	[dza]	ざっし	2.51	9	2.57	16	
	[dzɯ]	ずっと	2.69	5	2.91	5	
	[dze]	ぜんぜん	2.34	15	2.54	17	
	[dzo]	ぞう	2.80	2	2.74	8	
語頭の／ラ／行音		らいげつ	1.74	22	2.40	23	
語中の／ハ／行音		あさひ	2.11	20	2.63	12	
促 音		いっち	2.49	10	2.86	6	
拗 音		りゅうがく	2.71	3	3.00	4	
拗 音		せんせい	2.20	19	2.63	12	
長音	語 頭	そうじ	2.57	7	3.34	1	
	語 尾	がくしゅう	2.89	1	3.09	2	

が日本語の単語を発音する場合、平均難易度は2.41で、最も難しいと判断された項目は語尾の長音の「ガクシュウ」で、難易度は2.89である。それに対して、最も発音し易いと判断されているのは語頭／ラ／行音の「ライゲツ」で、難易度は1.83である。また、

表 2 中級学習者のアンケートの結果の分析表

内 容		調査項目	発 音		聞きとり		
			難易度	順位	難易度	順位	
/ウ/の音		[w]	うえ	1.86	22	2.41	14
母音の無声化			くさ	2.23	18	2.49	20
語頭の無声破裂音		[k <sup>h</sup> ]	かんこく	2.52	11	2.10	22
		[p <sup>h</sup> ]	ぴったり	2.55	9	2.34	17
		[t <sup>h</sup> ]	てんき	2.59	7	2.59	10
語中の無声破裂音		[k]	せいかつ	2.28	16	2.17	20
		[p <sup>h</sup> ]	せんぱい	1.97	19	2.20	19
		[t]	はいたつ	2.55	9	2.45	13
語頭の有声破裂音		[g]	がっこう	2.97	3	2.83	8
		[b]	ばんこく	2.28	16	2.59	10
		[d]	だいがく	3.00	2	2.93	2
語頭の/ツ/		[ts <sup>h</sup> w]	つくえ	3.17	1	3.03	6
語頭の/ザ/行音		[dza]	ざっし	2.34	15	2.38	16
		[dzw]	ずっと	2.66	5	2.66	9
		[dze]	ぜんぜん	2.03	18	2.31	18
		[dzo]	ぞう	2.41	13	3.10	4
語頭の/ラ/行音			らいげつ	1.83	23	2.10	44
語中の/ハ/行音			あさひ	1.93	20	2.49	12
促 音			いっち	2.41	13	3.07	5
拗 音			りゅうがく	2.38	4	3.24	1
拗 音			せんせい	1.90	21	2.14	21
長 音	語 頭		そうじ	2.59	7	3.17	3
	語 尾		がくしゅう	2.66	5	3.21	2

問題点の内容別に見ると長短母音の区別と語頭の/ザ/行音、拗音などが発音しにくいと判断されている。

また日本語の単語を聞き取る場合、平均難易度は2.71で、被調査者に最も難しいと

感じられているものは語頭の長音の「ソウジ」では難易度が3.34である。それに対して、最も易しいと判断されているものは語頭の／ラ／行音の「ライゲツ」で、難易度は2.40である。また、問題点の内容別にみると長短音の区別、拗音、促音、撥音などが難しいと判断されている。

次に表2から、中級学習者が、日本語の単語を発音する場合、平均難易度は2.43で、最も難しいと判断されたのは語頭の／ツ／音の「ツクエ」で、難易度は3.17である。それに対して、最も易しいと判断されたのは語頭の／ラ／行音の「ライゲツ」で、難易度は2.10であった。また、問題点の内容別に見ると長短母音の区別、語頭の有声破裂音、拗音などが発音しにくいと判断されている。

また、日本語の単語を聞き取る場合、平均難易度は2.61で、被調査者が最も難しいと感じているものは拗音の「リュウガク」で、難易度は3.24である。それに対して、最も易しいと判断されているものは語頭の無声破裂音／k／の「カンコク」と語頭の／ラ／行音の「ライゲツ」で、難易度はともに2.40である。また、問題点の内容別に見ると長短音の区別、語頭の／ザ／行音、促音などが難しいと判断されている。

次に、初級学習者の発音と聞き取りの難易度の平均評定値から、同じ調査項目について発音するより聞き取る方が難しいと判断されたのは、23の調査項目の中で22項目である。また平均難易度の値から見ても、聞き取りのほうが2.71で、発音の2.41より高い。従って、初級学習者においては、発音するより聞き取る方がより難しいと感じている。

次に、中級学習者の発音と聞き取りの難易度の平均評定値から、同じ調査項目について聞き取るより発音するほうが難しいと判断されたものには、語頭の無声破裂音／k／と／p／、語頭の有声破裂音／g／と／d／、語頭の／ツ／音などがある。これに対して発音するより聞き取る方が難しいと判断されたものには、長短音の区別、拗音、促音、語頭の／ゾ／音などがある。発音と聞き取り両方とも難しいと判断されたものには、最短音の区別、拗音、語頭の有声破裂音／g／と／d／、語頭の／ズ／、／ツ／音などがある。また平均難易度の値から見ると、聞き取りの2.61が発音の2.43より少し高い。

以上の分析結果から、初級学習者と中級学習者の発音の評定の結果を比較してみると、初・中級学習者の平均難易度はそれぞれ2.41と2.43で、それほど差は見られない。また、両グループの評定で同じ調査項目であるが難易度の評定値の差が大きく見られるものには、語頭の有声破裂音／g／（初級：2.37、中級：2.97）、語頭の有声破裂音／d／（初級：2.54、中級：3.00）などがある。

次に、両グループの聞き取りの評定の結果から、初・中級学習者の平均難易度はそれぞれ2.71と2.61である。両グループの評定で同じ項目であるが難易度の差が大きく見られるものには、語頭の無声破裂音／p／（初級：3.03、中級：2.34）、撥音（初級：2.64、中級：2.14）などがある。

結論として、初級学習者においては、日本語の単語を発音するより聞き取るほうがより難しいと思われる。また、中級学習者においても初級学習者の結果と同じ傾向が見られる。

## 3.2 発音テストの結果

表3は、初級学習者の男子3名と女子7名、計10名の発音テストに基づく日本語の発音の難易度の平均評定値を示している。表3から、難易度の最大値は2.57で、その項目は語頭の／ゾ／音の「ゾウセツ」である。これに対して難易度の最小値は1.03で、その項目は語中の無声破裂音／p／の「センパイ」と撥音の「シンブン」である。

次に、日本語の発音テストを文レベルで行った場合、発音の難易度の最大値は2.40で、その調査項目は「ゾウセツ」である。これに対して最小値は1.13で、その調査項目は促音の「キッテ」である。

次に、初級学習者が、日本語の発音テストを語レベルで行った場合の結果と文レベルで行った場合の結果とを比較してみると、同じ調査項目において語と文の両レベルでもに難しいと判断されるものには、語頭の／ゾ／と／ズ／音、語中の無声破裂音／k／、語頭の有声破裂音／g／、語頭の／ツ／音、そして語尾の長音などがある。また語と文両レベルで難易度の差が大きく見られるもので、語レベルで発音する方が難しいと判断されるものには語尾の長音がある。これに対して、文レベルで発音する方が難しいと判断されるものには語頭の／ザ／音と語中の／ハ／行音がある。全体的な難易度は語レベルの平均難易度が1.737で、文レベルの平均難易度は1.736である。従って、初級学習者が語のレベルで日本語を発音する場合と文のレベルで発音する場合、難易度の差はそれほどないと判断される。

表4は、中級学習者の男子1名と女子9名、計10名の発音テストの結果分析表である。表4から、難易度の最大値は2.70で、その調査項目は語頭の／ゾ／音の「ゾウセツ」である。これに対して、難易度の最小値は1.00で、その調査項目は撥音の「ジンブン」である。難易度の評定値から、中級学習者において、語レベルで発音する場合かなり難しいと判断されるものには、語頭の／ゾ／と／ズ／音、語頭の／g／と／d／音などがある。

次に、日本語の発音テストを文レベルで行った場合、難易度の最大値は2.17で、その調査項目は語中の／ハ／行音の「アサヒ」である。これに対して、最小値は1.00で、その調査項目は撥音の「シンブン」である。難易度の評定値から、中級学習者が文レベルで発音する場合、かなり難しいと思われるものには、語中の／ハ／行音、語頭の／ゾ／音と／ズ／音、そして拗音などがある。

次に、中級学習者において、日本語の発音テストを語レベルと文レベルで行った結果を比較してみると、同じ調査項目において語と文の両レベルでもに難しいと判断されるものには、語頭の／ゾ／と／ズ／音、語尾の長音などがある。また、語と文の両レベルにおいて難易度の差が大きく見られるもので、語レベルで発音する方が難しいと判断されるものには語頭の有声破裂音／g／と／d／、語頭の／ゾ／音、促音、語頭の長音などがある。これに対して、文レベルで発音する方が難しいと判断されるものには語中の／ハ／行音と拗音がある。全体的な平均難易度は語レベルと文レベルがそれぞれ1.56と1.41となっている。

さらに、語レベルの初級学習者と中級学習者の結果を比較してみると、初級学習者と中級学習者の平均難易度はそれぞれ1.74と1.56となっている。両グループのテストで同じ調査項目であるが難易度の評定値の差が大きいものには、語中の無声破裂音／k／（初級

表 3 初級学習者の発音テストの結果の分析表

内 容	調査項目	語レベル					文レベル					
		-1	0	1	D	OD	-1	0	1	D	OD	
／ウ／の音	[w]	うお	2	6	22	1.33	20	4	10	16	1.60	13
母音の無声化		きく	2	11	17	1.50	15	3	8	19	1.47	15
語頭の無声破裂音	[k <sup>h</sup> ]	けんきゅう	4	8	18	1.53	14	1	8	21	1.33	19
	[p <sup>h</sup> ]	パンヤ	2	13	15	1.57	13	1	10	19	1.40	17
	[t <sup>h</sup> ]	とうきょう	9	11	10	1.97	8	1	16	13	1.60	13
語中の無声破裂音	[k]	がいこく	10	14	6	2.13	4	13	11	6	2.23	2
	[p]	せんばい	0	1	29	1.03	22	0	6	24	1.20	22
	[t]	ふたつ	8	15	7	2.03	6	3	23	4	1.97	8
語頭の有声破裂音	[g]	げんこう	11	7	12	1.97	8	13	10	7	2.20	3
	[b]	ばんぐみ	9	8	13	1.86	10	9	9	12	19.0	10
	[d]	でんき	13	2	15	2.00	7	10	4	16	1.80	12
語頭の／ツ／	[ts <sup>h</sup> w]	つくえ	8	18	4	2.13	4	3	24	3	2.00	7
語頭の／ザ／行音	[dza]	ざっし	4	7	19	1.50	15	12	12	6	2.20	3
	[dzw]	ずつう	13	13	4	2.30	3	11	11	8	2.10	5
	[dze]	ぜんぜん	0	15	15	15.0	15	1	9	20	1.37	18
	[dzo]	ぞうせつ	19	9	2	2.57	1	16	10	4	2.40	1
語頭の／ラ／行音		らいげつ	0	11	19	1.37	19	0	13	17	1.43	16
語中の／ハ／行音		あさひ	4	15	11	1.77	11	8	16	6	2.07	6
促 音		きって	2	2	26	1.20	21	1	2	27	1.13	23
拗 音		はっぴゃく	3	15	12	1.70	12	8	9	13	1.83	11
拗 音		しんぶん	0	1	29	1.03	22	1	5	24	1.23	21
長 音	語頭	そうじ	5	4	21	1.47	18	2	3	25	1.27	20
	語尾	こしょう	20	5	5	2.50	2	11	7	12	1.97	8

D：難易度の評定値

OD：順位

-1：意味が分からない。

0：意味は通じるが自然な日本語ではない。

1：自然な日本語である。

表 4 中級学習者の発音テストの結果の分析表

内 容	調査項目	語レベル					文レベル					
		-1	0	1	D	OD	-1	0	1	D	OD	
／ウ／の音	[w]	うお	0	2	29	1.07	22	4	4	22	1.40	13
母音の無声化		きく	1	5	24	1.23	19	0	3	27	1.10	19
語頭の無声破裂音	[k <sup>h</sup> ]	げんきゅう	2	5	23	1.30	16	4	7	19	1.50	9
	[p <sup>h</sup> ]	パンや	0	7	23	1.23	19	0	6	24	1.20	17
	[t <sup>h</sup> ]	とうきょう	7	5	18	1.63	8	1	3	26	1.17	18
語中の無声破裂音	[k]	がいこく	4	4	22	1.40	15	7	8	15	1.73	5
	[p]	せんばい	0	4	30	1.27	17	0	2	28	1.07	21
	[t]	ふたつ	1	12	17	1.47	13	5	9	16	1.63	7
語頭の有声破裂音	[g]	げんこう	14	4	42	2.07	3	6	2	22	1.47	11
	[b]	ばんぐみ	6	6	18	1.60	9	5	7	18	1.57	8
	[d]	でんき	13	2	15	1.93	4	6	1	23	1.43	12
語頭の／ツ／	[ts <sup>h</sup> u]	つくえ	0	8	22	1.73	6	0	15	15	1.50	9
語頭の／ザ／行音	[dza]	ざっし	5	6	19	1.53	11	2	8	20	1.40	13
	[dzw]	ずつう	10	15	5	2.17	2	6	16	8	1.03	2
	[dzw]	ぜんぜん	0	13	17	1.43	14	0	9	21	1.30	15
	[dzo]	ぞうせつ	21	9	0	2.70	1	10	8	12	1.93	2
語頭の／ラ／行音		らいげつ	0	5	25	1.17	21	3	1	26	1.23	16
語中の／ハ／行音		あさひ	0	8	22	1.27	17	10	15	5	2.17	1
促 音		きって	6	9	15	1.70	7	7	3	27	1.10	19
拗 音		はっぴゃく	2	12	16	1.53	12	7	11	12	1.83	4
拗 音		しんぶん	0	0	30	1.00	23	0	0	30	1.00	23
長 音	語頭	そうじ	4	10	16	1.60	9	0	2	28	1.07	21
	語尾	こしょう	4	5	11	1.77	5	5	10	15	1.66	6

D：難易度の評定値

OD：順位

-1：意味が分からない。

0：意味は通じるが自然な日本語ではない。

1：自然な日本語である。

: 2.13, 中級: 1.40), 語頭の/ツ/音 (初級: 2.13, 中級: 1.73), 語尾の長音 (初級: 2.50, 中級: 1.77) などがある。また, 初級学習者と中級学習者にとってともに難しいと判断されるのには, 語頭の/ゾ/と/ズ/音, 語頭の有声破裂音/g/と/d/音などがある。

また, 文レベルでの初級学習者と中級学習者の結果を比較してみると, 初級学習者と中級学習者の平均難易度はそれぞれ1.74と1.41となっている。両グループのテストで同じ調査項目であるが難易度の評定値の差が大きいものには, 語中の無声破裂音/k/ (初級: 2.23, 中級: 1.73), 語頭の/ツ/音 (初級: 2.00, 中級: 1.50), 語頭の/ゾ/音 (初級: 2.20, 中級: 1.40) などがある。また, 初級学習者と中級学習者にとってともに難しいと判断されるものには, 語中の/ハ/行音, 語頭の/ゾ/と/ズ/音, 語頭の有声破裂音/g/音などがある。

発音テストの結果では, 初級学習者の場合, 発音の難易度は語と文の両レベルにおいてほぼ同様である。中級学習者の場合は, 文レベルより語レベルのほうが難易度が高い。特に, 文レベルの評定では, 被調査者の日本語の発音が「意味は通じるが自然な日本語ではない」の「0」と判定されたものが数多くあった。これは, 日本語話者が文レベルで評定を行った場合は, 語レベルでの評定と違って文脈の情報の影響があるためであると考えられる。つまり, これは文レベルでは語レベルよりある程度誤りの許容度が認められることであると思われる。

### 3.3 聞き取りテストの結果

表5は, 初級学習者の男子6名と女子29名, 計35名の日本語の聞き取りテストの誤聴率を示している。表5から, 聞き取りテストを語レベルで行った場合の結果を見ると, 誤聴率の最大値は/ウ/音の「ウソ」の49.5%で, 105回のうちに52回を誤ったことより, 最も難しいものと思われる。これに対して, 語頭の無声破裂音/p/の「ピッタリ」と語頭の長音の「ホウホウ」の場合は105回のうち1回も誤らなかったので, それほど問題にならないと思われる。全体的にみると, 初級学習者において難しいと思われるものには/ウ/の音をはじめ, 撥音, 語中の/ハ/行音, 語頭の/ゾ/音などがある。特に破裂音では, 語頭の有声破裂音が他の破裂音よりかなり難しいと思われる。

次に, 日本語の聞き取りテストを文レベルで行った場合, 誤聴率の最大値は語頭の有声破裂音/g/の57.1%で, 105回のうち60回誤り, 最も難しいと判断される。これに対して, 誤聴率が2.9%の無声破裂音/p/は105回のうち3回だけ誤り, それほど問題にならないと思われる。全体的に見ると, 初級学習者にとってかなり難しいと思われるものには, 語頭の無声破裂音/g/, 語中の/ハ/行音と語頭の/ザ/と/ゾ/音などがある。

そこで, 初級学習者において, 日本語の聞き取りテストを語レベルと文レベルでの結果で比較してみると, 同じ調査項目において語と文の両レベルともに難しいと思われるものには, /ウ/の音, 語頭の/ゾ/音, そして語頭の有声破裂音の/g/などがある。また, 語と文の両レベルで誤聴率の差が大きく見られるものには, 語頭の有声破裂音/g/と/d/, 語頭/ツ/, 語頭の長音などがある。全体的に見ると, 中級学習者において, 語レベルより文レベルで聞き取るほうがより難しいと思われる。

表 5 初級学習者の聞き取りテストの分析表

内 容	調査項目	正解	語レベル					文レベル					
			1	2	3	E (%)	OD	1	2	3	E (%)	OD	
「ウ」の音	[w]	うそ	2	52	53	0	49.5	1	41	46	18	39.0	5
母音の無声化		くつ	2	19	73	13	31.0	8	7	83	15	20.9	11
語頭の無声 破裂音	[k <sup>h</sup> ]	けんこう	2	15	83	7	14.3	13	18	78	9	17.1	14
	[p <sup>h</sup> ]	びったり	1	103	2	0	0	22	62	40	3	2.9	23
	[t <sup>h</sup> ]	とうとう	1	93	1	12	11.4	15	84	15	6	14.3	15
語中の無声 破裂音	[k]	こうかい	3	8	2	95	7.6	18	12	42	51	11.4	17
	[p]	せんぱい	2	2	102	1	2.9	19	3	104	1	3.8	21
	[t]	かたち	2	11	91	3	10.5	17	5	57	43	4.8	20
語頭の有声 破裂音	[g]	ごうけい	2	0	83	22	21.0	9	23	45	37	57.1	1
	[b]	ほうめい	2	15	88	1	14.3	13	13	89	3	12.4	16
	[d]	どくしん	3	12	11	82	11.4	15	3	32	70	30.5	9
語頭の ツ／	[ts <sup>h</sup> w]	つうやく	2	19	85	1	19.0	10	31	66	8	37.1	6
語頭の ザ／行音	[dza]	ざぶとん	2	18	72	14	31.4	6	13	58	34	44.8	3
	[dzw]	ずいぶん	3	1	16	88	16.2	12	1	18	86	18.1	12
	dze]	ぜんぶ	1	104	1	0	0.9	21	99	2	4	5.7	19
	[dzo]	ぞうせん	2	6	65	34	38.1	3	10	60	35	42.9	4
語頭の／ラ／行音		れんらく	2	33	30	42	31.4	6	33	27	45	31.4	8
語中の／ハ／行音		にほんご	3	18	23	64	39.0	2	23	29	53	49.5	2
促 音		もってきて	2	15	3	87	17.1	11	29	5	71	32.4	7
拗 音		ひゃく	2	2	102	1	2.9	19	2	2	102	3.8	21
拗 音		せんせい	2	27	38	40	38.1	3	22	59	24	22.9	10
長 音	語 頭	ほうほう	3	19	0	86	0	22	24	19	62	18.1	12
	語 尾	ぜいせい	1	71	34	0	32.4	5	73	22	10	9.5	18

表6は、中級学習者の男子1名と女子28名、計29名の日本語の聞き取りテストの誤聴率を示している。表6から日本語の聞き取りテストを語レベルで行なった場合、誤聴率の最大値は60.9%の／ウ／音である。これに対して、誤聴率0%の調査項目には語頭の無声

表 6 中級学習者の聞き取りテストの分析表

内 容	調査項目	正解	語レベル					文レベル					
			1	2	3	E (%)	10	1	2	3	E (%)	OD	
／ウ／の音	[w]	うそ	2	53	34	0	60.9	1	10	66	11.5	9	9
母音の無声化		くつ	2	15	60	12	31.4	2	5	76	6	12.6	8
語頭の無声 破裂音	[k <sup>h</sup> ]	けんこう	2	5	79	3	5.7	12	12	68	7	11.5	9
	[p <sup>h</sup> ]	びったり	1	85	2	2	0	20	78	0	9	10.3	11
	[t <sup>h</sup> ]	とうとう	1	86	1	0	1.1	17	80	6	1	6.9	13
語中の無声 破裂音	[k]	こうかい	3	3	4	80	4.6	13	4	3	80	2.9	17
	[p]	せんばい	2	2	85	0	2.3	15	2	84	1	3.4	16
	[t]	かたち	2	4	81	2	4.6	13	2	76	9	2.3	19
語頭の有声 破裂音	[g]	ごうけい	2	1	64	22	26.4	4	7	46	34	47.1	1
	[b]	ほうめい	2	19	68	0	21.8	7	3	83	1	3.4	16
	[d]	どくしん	3	8	5	74	9.2	11	0	13	74	14.9	6
語頭の ／ツ／	[ts <sup>h</sup> ]	つうやく	2	2	85	0	2.3	15	7	75	5	13.8	7
語頭の ／ザ／行音	[dza]	ざぶとん	2	15	66	6	24.1	5	0	65	22	25.3	4
	[dzw]	ずいぶん	3	1	8	78	0.3	19	0	1	86	1.1	20
	[dze]	ぜんぶ	1	67	0	0	0	20	87	0	0	0	23
	[dzo]	ぞうせん	2	18	61	8	29.9	3	5	55	27	36.8	2
語頭の／ラ／行音		れんらく	2	20	25	32	23.0	6	27	44	16	31.0	3
語中の／ハ／行音		にほんご	3	3	7	77	11.5	10	1	5	81	6.9	13
促 音		もってきて	3	0	0	87	0	20	14	1	72	17.2	5
拗 音		ひゃく	2	0	87	0	0	20	0	8	1	1.1	20
拗 音		せんせい	2	17	56	14	16.9	8	11	70	6	6.9	13
長 音	語 頭	ほうほう	3	15	1	71	1.1	17	4	1	82	1.1	20
	語 尾	ぜいせい	1	74	13	0	14.9	9	72	8	7	8.0	12

破裂音/p/と拗音、語頭の/ゼ/音、そして促音などがある。それらは87回のうちに誤って判断されたものが1つもなかったので、中級学習者にはそれほど問題にならないと思われる。全体的に見ると、中級学習者にとってかなり難しいと思われるものには、/ウ

／の音をはじめ、母音の無声化、語頭の／ゾ／の音などがある。

次に、日本語の聞き取りテストを文レベルで行った場合、誤聴率の最大値は47.1%の語頭の有声破裂音／g／で、87回のうち41回誤って判断された。これに対して、誤聴率が0%の調査項目は語頭の／ゼ／音である。全体的に見ると、中級学習者にとってかなり難しいと思われるものには、語頭の有声破裂音の／g／、語頭の／ラ／音、語頭の／ゾ／行音などがある。

そこで、中級学習者において、日本語の単語の聞き取りテストを語レベルと文レベルで行った場合の結果を比較してみると、同じ調査項目において、語と文の両レベルともに難しいと思われるものには、語頭の／ゾ／と／ザ／、語頭の有声破裂音の／g／、そして語頭の／ラ／行音などがある。また、語と文の両レベルで誤聴率の差が大きく見られるものには、／ウ／の発音、語頭の有声破裂音／b／、語頭の長音などがある。特に破裂音では、語頭の有声破裂音のほうが他の破裂音より難しいと判断される。全体的に見ると、中級学習者にとっても、語レベルで聞き取るより文レベルで聞き取るほうが難しいと思われる。

さらに、まず語レベルでの初級学習者と中級学習者の結果を比較してみると、初・中級学習者の平均誤聴率はそれぞれ19.1%と12.7%となっている。両グループのテストで同じ調査項目であるが、誤聴率の差が大きく見られるものには、語頭の無声破裂音／t／（初級：11.4%，中級：1.1）、語頭の／ツ／音（初級：19%，中級：2.3%）、発音（初級：38.1%，中級：16.9%）などがある。また、初・中級学習者にとってともに難しいと判断されるものには、／ウ／の音、語頭の／ゾ／と／ザ／音、語頭の有声破裂音／g／、語頭の／ラ／行音などがある。続いて、文レベルでの初級学習者と中級学習者の結果を比較してみると、初・中級学習者の平均誤聴率はそれぞれ23.0%と12.0%となっている。両グループのテストで同じ調査項目であるが誤聴率の差が大きく見られるものには、／ウ／の音（初級：39.0%，中級：11.5%）、語中の／ハ／行音（初級：49.5%，中級：6.9%）、語頭の長音（初級：18.1%，中級：1.1%）などがある。全体の結果から見ると、日本語を聞き取る場合、初級学習者と中級学習者とではかなり差があることが分かる。

発音テストの結果と聞き取りテストの結果を難しさの順位によって比較すると表7・8になる。

### 3.4 音声上の誤りの傾向とその原因

今回の調査で明らかになった韓国人話者における日本語の音声上の誤りの傾向とその原因について考察すると次のようになる（但し、誤りの傾向については、日本語話者が発音テストを評定したものをもとにした）。

表9から、以下のようなことが分かる／ウ／音の場合、日本語の「ウオ」[uo]が[uo]（韓国語の円唇母音 [u]）のように発音される傾向が見られる。それは、韓国語の「우」[u]が日本語の「ウ」[u]に比べて円唇性が強く後ろ寄りで、狭母音であるので韓国人は日本語の「ウ」[u]を韓国語の「우」[u]で代用する傾向があるからである。例えば、  
「うそ」[uso]→[uso]

母音の無声化では、日本語のキク [k<sup>h</sup>ik<sup>h</sup>u] が [khiku] のように発音される傾向がみられる。韓国語でも母音が無声子音に狭まれ無声化される場合がある。例えば、

表 7 初級学習者の発音と聞き取りテストの結果の比較表

語レベル				文レベル			
OD	発音	OD	聞き取り	OD	発音	OD	聞き取り
1	語頭の/ゾ/	1	/ウ/の音	1	語頭の/ゾ/	1	語頭の/g/
2	語尾の長音	2	語中の/ハ/	2	語中の/k/	2	語中の/ハ/
3	語頭の/ズ/	3	語頭の/ゾ/	3	語頭の/g/	3	語頭の/ザ/
4	語頭の/k/	3	撥音	3	語頭の/ザ/	4	語頭の/ゾ/
4	語頭の/ツ/	5	語尾の長音	5	語頭の/ズ/	5	/ウ/の音
6	語中の/k/	6	語頭の/ラ/	6	語中の/ハ/	6	語頭の/ツ/
7	語頭の/d/	6	語頭の/ザ/	7	語頭の/ツ/	7	促音
8	語頭の/g/	8	母音の無声化	8	語中の/t/	8	語頭の/ラ/
8	語頭の/t/	9	語頭の/g/	9	語尾の長音	9	語頭の/d/
10	語頭の/b/	10	語頭の/ツ/	10	語頭の/b/	10	撥音
11	語中の/ハ/	11	促音	11	拗音	11	母音の無声化
12	拗音	12	語頭の/ズ/	12	語頭の/d/	12	語頭の/ズ/
13	語頭の/p/	13	語頭の/t/	13	語頭の/t/	12	語頭の長音
14	語頭の/t/	13	語頭の/b/	13	/ウ/の音	14	語頭の/k/
15	語頭の/ザ/	15	語頭の/t/	15	母音の無声化	15	語頭の/t/
15	母音の無声化	15	語頭の/d/	16	語頭の/ラ/	16	語頭の/b/
17	語頭の/ゼ/	17	語中の/t/	17	語頭の/p/	17	語頭の/k/
18	語頭の長音	18	語中の/k/	18	語頭の/ゼ/	18	語尾の長音
19	語頭の/ラ/	19	語中の/p/	19	語頭の/k/	19	語頭の/ゼ/
20	/ウ/の音	19	拵音	20	語頭の長音	20	語中の/t/
21	促音	21	語頭の/ゼ/	21	撥音	21	拗音
22	語中の/p/	22	語頭の/p/	22	語中の/p/	21	語中の/p/
23	撥音	22	語頭の長音	23	促音	23	語頭の/p/

OD : 順位

表 8 中級学習者の発音と聞き取りテストの結果の比較表

語レベル				文レベル			
OD	発音	OD	聞き取り	OD	発音	OD	聞き取り
1	語頭の /ゾ/	1	/ウ/の音	1	語中の /ハ/	1	語頭の /g/
2	語頭の /ズ/	2	母音の無声化	2	語頭の /ズ/	2	語頭の /ゾ/
3	音頭の /g/	3	語頭の /ゾ/	2	語頭の /ゾ/	3	語頭の /ラ/
4	語頭の /d/	4	語頭の /g/	4	拗音	4	語頭の /ザ/
5	語尾の長音	5	語頭の /ザ/	5	語中の /k/	5	促音
6	語頭の /ツ/	6	語頭の /ラ/	6	語尾の長音	6	語頭の /d/
7	促音	7	語頭の /b/	7	語中の /t/	7	語頭の /ツ/
8	語頭の /t/	8	撥音	8	語頭の /b/	8	母音の無声化
9	語頭の長音	9	語尾の長音	9	語頭の /k/	9	/ウ/の音
9	語頭の /b/	10	語中の /ハ/	9	語頭の /ツ/	9	語頭の /k/
11	語頭の /ザ/	11	語頭の /d/	11	語頭の /g/	11	語頭の /p/
12	拗音	12	語頭の /k/	12	語頭の /k/	12	語尾の長音
13	語中の /t/	13	語中の /k/	13	語頭の /ザ/	13	語頭の /t/
14	語頭の /ゼ/	13	語中の /t/	13	/ウ/の音	13	語中の /ハ/
15	語中の /k/	15	語中の /p/	15	語頭の /ゼ/	13	撥音
16	語頭の /k/	15	語頭の /ツ/	16	語頭の /ラ/	16	語中の /p/
17	語中の /p/	17	語頭の /t/	17	語頭の /p/	16	語中の /k/
17	語中の /ハ/	17	語頭の長音	18	語頭の /t/	18	語中の /k/
19	母音の無声化	19	語頭の /ズ/	19	母音の無声化	19	語中の /t/
19	語頭の /p/	20	語頭の /ゼ/	19	促音	20	語頭の /ズ/
21	語頭の /ラ/	20	促音	21	語尾の長音	20	拗音
22	/ウ/の音	20	拗音	23	語中の /p/	20	語頭の長音
23	撥音	20	語頭の /p/	23	撥音	23	語頭の /ゼ/

OD：順位

表 9 誤りの傾向の分析表

調査項目	主な誤りの傾向
「ウオ」	「ウオ」 ([uo], 韓国語の円唇母音 [u])
「キク」	「キク」 ([khiku])
「ケンキュウ」	「ケンキュウ」 ([kheŋk'ju:], 「ゲンキュウ」
「パンヤ」	「パンヤ」 ([p'aŋja], 韓国語の硬音 [p'])
「とうきょう」	「トウキョウ」 ([tho:k'jo:], 「ドウキョウ」
「ガイコク」	「ガイゴク」, 「カイゴク」
「フタツ」	「フダツ」, 「フダス」
「ゲンコウ」	「ケンコウ」, 「ゲンゴウ」
「デンキ」	「テンキ」
「ツクバ」	「チュクバ」, 「スクバ」, 「スックバ」
「ザッシ」	「ジャシ」, 「チャッシ」, 「ツォッシ」
「ズツウ」	「ヂュウツウ」, 「ツツウ」, 「ジュウツウ」,
「ゼンゼン」	「ジェンジェン」
「ゾウセツ」	「ジョウセツ」, 「ズォウセツ」, 「ソウセツ」
「ライゲツ」	「ナイゲツ」
「アサヒ」	「アサイ」
「キッテ」	「キテ」
「ハッピーク」	「ハッパク」, 「ハッピーク」, 「ハッパアク」
「シンブン」	「シンブン」 ([sinbuN])
「ソウジ」	「ソジ」, 「スォウジ」
「コショウ」	「コシヨ」, 「コウシヨウ」

「척척하다」 [tʃhik<sup>o</sup>tʃik<sup>o</sup>hada] (くすんでいる)

ところが、韓国語では母音の無声化はそれほど顕著な現象ではないし、母音の無声化が起こる音節の数も少ないので、韓国語学習者は母音の無声化現象に敏感ではないと思われる。

韓国人話者が日本語の /p, t, k/ を韓国語の /ph, th, kh/ あるいは日本語の /b, g, d/, 韓国語の /p', t', k'/ のように発音する傾向がみられる。それは、韓国語では日本語の無声破裂音 /p, t, k/ の音声的特徴に一致する音が存在せず、また、日本語では無声破裂音 /p, t, k/ が気音の強弱によって語頭と語中が区別されるが、韓国語の破裂

音は気音の強弱と喉頭緊張によって、軟音/ p, t, k /, 気音/ ph, th, kh /, 硬音/ p', t', k' / に分けられるからである。しかし、韓国語の気音/ ph, th, kh / は日本語の/ p, t, k / より気音性がかなり強いし、韓国語の/ p, t, k / は日本語の/ p, t, k / より気音性が弱い音であるためである。例えば、

「韓国」[k<sup>h</sup>ajk'oku]→[k<sup>h</sup>ajk'oku]/[gajk'oku]

次に、韓国語では無声破裂音/ p, t, k / が有声音の間で有声音/ b, d, g / になる現象がある。例えば、

「감」[kam]+「기」[ki]→「감기」[kamgi] (風邪)

また韓国語では、語中の無声破裂音/ p, t, k / が音節末音<sup>(65)</sup> (特に [p<sup>■</sup>, t<sup>■</sup>, k<sup>■</sup>])<sup>(66)</sup> の後で/ p', t', k' / のように硬音化<sup>(67)</sup>される現象がある。例えば、

「갔다」[kak]+「다」[ta]→「갔다」[kak<sup>■</sup>da] (行った)

従って、韓国語話者が日本語の語中の/ p, t, k / を/ b, d, g / あるいは/ p', t', k' / のように発音しやすいと思われる。例えば、

「아たたかい」[ataatakai]→「아ただかい」[atadak'ai]/「아だだかい」[adadak'ai]

韓国語では語頭には有声破裂音が現れないので、韓国語話者が日本語の語頭の有声破裂音を無声破裂音/ p, t, k / に発音しやすいと思われる。例えば、

「대이가く」[daigaku]→[taigaku]

韓国語では日本語の/ ツ / に相当する音が存在しないので、日本語の/ ツ / を [tshu], [tʃu], [s'u], [su] のように発音する可能性が高いと思われる。例えば、

「つくば」[ts<sup>h</sup>wukuba]→[tʃhuk'uba]/[tʃ'uk'uba]/[s'uk'uba]/[suk'uba]

韓国語では外来語と特定方言を除いて語頭に [r] が立たないことと漢語の場合は/ ラ / 行音が脱落する場合 (라디오 [radio] (ラジオ), 「낙원」[nak<sup>■</sup>wan] (楽園) ([r] が [n] に変わる), 「요리」[jori] (料理) ([i, j] に先行する場合は脱落する)) もあるので日本語の「ライゲツ」を「ナイゲツ」のように発音しやすいと思われる。

語中の/ ハ / 行音では日本語の「アサヒ」が「アサイ」のように発音される傾向が見られる。それは、韓国語では語中の [h] が脱落してしまう現象 (「영」[jaŋ]+「향」[hjaŋ] →「영향」[jaŋ(h)jaŋ] (影響)) があるので、日本語の「ニホンジン」を「ニオンジン」のように発音する傾向があると思われる。

促音では、日本語のキッテ [k<sup>h</sup>it<sup>□</sup>t'e]<sup>(68)</sup> が [khit'e] あるいは [kit<sup>■</sup>t'e] のようになってしまう傾向が見られる。韓国語では促音に似た音節末音 (特に [k<sup>■</sup>, p<sup>■</sup>, t<sup>■</sup>]) が存在する。しかし、それらは日本語の促音のようにそれ自体が独立した音素として存在せず、前の音節に含まれてしまうので、日本語の促音のように独立した長さは持たない。例えば、

「입다」[ip<sup>■</sup>t'a] (着る)

撥音については、韓国語で、日本語の撥音と似た音節末音 (/ m, n, ŋ /) があるが日本語の撥音のように独立した長さは持たないため、日本語の拍<sup>(69)</sup>に関する感覚が欠如している傾向が見られる。例えば、

「안경」[angjaŋ] (眼鏡)

長短母音の区別では、語頭の長音より語尾の長音の発音が難しく思われる。これは、韓

国語では長音が一音節だけに現れることと、長音が音節以下では短母音化されてしまう現象とに関係があると思われる。例えば、

「밤」[bam:]→「군밤」[kunbam] (焼き栗)

#### 4. 結 論

以上、韓国人話者の日本語音声上の問題点について調査を行い、分析した結果、韓国人話者の日本語音声上の問題点がある程度明らかにすることができた。

発音テストの結果、文レベルの評定で、被調査者の日本語の発音が「意味は通じるが自然な日本語ではない」の「0」と判定されたものが数多くあった。これは、日本語話者が文レベルで評定を行った場合は、語レベルでの評定と違って文脈の情報の影響があるためであると考えられる。つまり、語レベルで「-1」（自然な日本語ではない）と判断された項目が文レベルでは「0」と判断される傾向が見られるのは、文脈の中では誤りの許容度がある程度認められるからであると思われる。

聞き取りテストの結果から、初級学習者の場合、文レベルで聞き取るほうが語レベルで聞き取るより難しいと判断されたが、中級学習者の場合は文レベルと語レベルの間で聞き取りの能力にはそれほど差がないと判断される。また、初級と中級学習者の結果から、初級レベルで難易度の高い項目でも、中級レベルではそれほど問題にならないものと中級レベルでも問題になるものがある。前者は、ある程度の学習によって改善できるものと思われるが、後者は、韓国語話者においては非常に難しいものであると考えられる。これについては今後の研究によって明らかにしていきたい。

アンケート調査による被調査者の主観的な評定の結果と発音及び聞き取りテストの結果を比較してみると、かなり違った傾向が見られる。また、音声上の誤りの傾向には、特に、日本語の音声的特徴に一致する音が韓国語に存在しない場合は、韓国語の音を代用する母国語の干渉現象が見られる。

以上の結果から、今回取り上げた問題点はそれぞれ重大な問題であることを再認識した。そして、これらの問題点を一つ一つ徹底的に分析し韓国人話者のためのより効果的な日本語教育の指導法や教材などを開発しなければならない。

今後の課題は、今回問題にしなかったアクセント及びアクセント以外の諸要因についても研究しなければならないということである。音響音声学的な観点からも分析すべきである。なお、音声上の誤りの教育的な比重について考えなければならない。

#### 注

- (1) 稲葉継雄 (1978), 李 明姫 (1986), 金 淑子 (1983), 金 貞淑他 (1978), 辛 容泰 (1987), 山田幸宏 (1963)。
- (2) 東京方言者である。
- (3) 語レベルの調査項目:「れんらく」  
文レベルの調査項目:「あしたれんらくしてください。」
- (4) 本研究では、韓国語の有気音を表す記号は本来 [kh] のように [h] を右上に付けるべきものだが、日本語の語頭の有気音と区別のために、他の音声記号と並べて置くことにする。また、音声特徴的

な面では、韓国語の有気音が日本語のそれよりかなり強い。

- (5) 韓国語では、音節末音は〔k, p, t, l, m, n, ŋ〕の7つに限られる(李喆洙(1985) p. 70)。
- (6) [■] は内破音を表すもので、韓国語の破裂音/p, t, k/は語末が/p, t, k/で終わる場合と、後続する音節の頭音が/p, t, k/の場合は音節末で破裂されなくて閉鎖の状態を保つ(大坪一夫監修(1987) p. 84)。
- (7) 韓国語で[ʔ]のような硬音を表すもの(「罸」[k'ot■])は、日本語で撥音あるいは促音の後に来る無声子音を表すもの(「立派」[rip■p'a])よりは喉頭緊張が強い(同上 p. 82)。
- (8) 内破と内破の持続部のみで調音を打ち切る場合を[□]のように示す。(城生佰太郎(1988) p. 134)
- (9) 拍については異論があるが、本研究では調査の単位として用いることにする。

#### 参考文献

1. 天沼 寧, 大坪一夫, 水谷 修(1978):『日本語音声学』, くろしお出版
2. 今田滋子(1981):『教師用日本語教育ハンドブック6 発音』, 国際交流基金
3. 稲葉継雄(1978):「韓国人の日本語学習における困難点—発音を中心として—」, 『外国人と日本語4』, 筑波大学日本語教育プロジェクト
4. 李 喆洙(1985):『韓国語音韻学』, 仁荷大学校出版局
5. 李 明姬(1986):「韓国における日本語初級課程学生の聴音能力と発音能力の実態調査」『国語学研究』26, 東北大学文学部
6. 大坪一夫監修(1987):『日本語教師養成通信講座D—1 日本語の音声(1)』, 株式会社アルク
7. 金 淑子(1983):「日本語 学習者 의 音声的誤診에 관한 研究」『祥明女子大学論文集』12集, 祥明女子大学
8. 金 貞叔, 朴 聖雨, 洪 思満(1978):「韓国人の日本語学習における発音難易度の分析とくに両国間の音声組織の対照を中心に」『外国人と日本語4』, 筑波大学日本語教育プロジェクト
9. 辛 容泰(1987):「日本語音声教育에서의 問題事例考—教育現場에서 부딪치는 問題들中心으로」『日本学報』, 韓国日本学会
10. 城生佰太郎(1988):『音声学 新装増訂版』, アポロ音楽工業
11. 허 응(1985):『국어음운학』—우라말 소리의 오늘·어제—, 샘출판사
12. 黄 燦鎬, 張 爽鎮, 李 季順, 李 吉鹿(1988):『韓日語対照分析』, 明知出版社
13. 山田辛宏(1963):「期鮮人の日本語音認識に於ける難易度の測定について」『日本語教育』62号, 日本語教育学会
14. ロバート・ラド(1961):『言語テスト』, 大修館書店

#### 付 記

本論文をまとめるに当たって有益な御助言をくださった筑波大学文芸言語学系の芳賀純先生にお礼申し上げます。

(筑波大学博士課程 文芸・言語研究科 応用言語学)